慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	レビヤタンと地獄の口 : Moby-Dickへの中世的マルジナリア
Sub Title	Leviathan and the mouth of hell : a medieval Marginalia to Moby-Dick
Author	松田, 隆美(Matsuda, Takami)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1998
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.75, (1998. 12) ,p.159(222)- 170(211)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	山本晶教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00750001-0170

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

レビヤタンと地獄の口
—*Moby-Dick* への中世的マルジナリア

松田　隆美

16世紀のジャン・ジャック・ボワサール『人生の劇場』(1)は，新旧約聖書の主要なエピソードを60点の銅版画で表し，それぞれに教訓的なラテン語の4行詩と散文の解説を付した寓意図本（エンブレム・ブック）であるが，そのなかに反逆天使の失墜の図版がある。ピーテル・ブリューゲルの同名の絵画（ブリュッセル，王立美術館蔵）を想起させるようなグロテスクな反逆天使たちが，天上から追い落とされて地獄の口に飲み込まれる図版である。［図1］地獄の口の図像は中世を通じて極めてポピュラーなものだが，中世の伝承では地獄の口とは聖書に登場する強大な怪物，レビヤタンの口であり，さらに聖書釈義学の伝統的解釈では，レビヤタンとは鯨に他ならない。本稿では，鯨をめぐる中世の表象を考察し，16世紀の地獄の口が受け継いでいる中世的伝統を明らかにする。

古代から中世にかけて，鯨は象とならんで巨大な生物の代表であり，それは中世の航海譚において驚異の対象として登場する。西ヨーロッパから西あるいは北をめざす航海譚は，現実の地理世界から徐々に仮定の地理へと移行してゆくが，鯨はしばしばその境界線上に登場する。13世紀末の写本にラテン語で記されたある北方世界の紀行文は，アメリカ大陸（再）発見の航海記である。ヨーロッパにおけるアメリカ大陸への最古の言及は，ブレーメンのアダム（1070年頃）がデーン人から聞いた話として書き残した，「葡萄が自生していて，素晴らしい葡萄酒ができるのでヴィンランドと呼ばれている島」という記述である。また13世紀に「ヴィンランド・サガ」（あるいは「グリーンランド人のサガ」として集成されるサガは，10世紀のアイスランド人による北アメリカの探検と入植の記録である。著者

［図１］

がこうしたテクストを知っていたか否かは定かではないが，アメリカ大陸に「我々の時代に発見された島」として言及している。航海者は，スカンジナビア半島を経てさらに北へ進むと，最後には「はるかに大きな島」に行き着く。そこには「多くの住民がいるが，彼らは残念なことに異教徒であり」，その島は黄金を産出する。このスカンジナビア半島，グリーンラ

ンド，アメリカ大陸と進むにつれて異界性を増してゆく描写の過程で，鯨も登場する。北ノーウェイの沿岸には多くの鯨が見られるが，「彼らは嵐になると海岸の岩山にしっかりと食らいつくが，突然の荒波で流され，しばしば歯だけが抜け落ちて岩肌に残される。」(2)

6世紀のアイルランドの聖人，聖ブレンダンが7年間にわたって西方の海を航海し，神に示された「秘密の地」(terra secreta) を発見したという航海譚は，9世紀にラテン語で書き記され，その後アングロ・ノルマン語をはじめ様々な言語に訳されてヨーロッパ中に拡がった。この想像上の航海譚にも鯨が登場する。9世紀にラテン語で記された『聖ブレンダン伝』では，一行がイースターを祝う場所を求めて神に祈ると，突然鯨が海中から現れる。一行は「野原のように平らで固い」その背中でミサを執り行う。ミサが終わると鯨はまた海中に戻ってゆくが，7年間の航海のあいだ毎年イースターになると鯨はやってきて，一行はその背中で祝日を祝うことが出来たのである。9世紀の『聖ブレンダンの航海』でも同じエピソードが登場するが，そこでは鯨が一行のもとにやってくるのではなく，一行は毎年，最初に鯨と出会った海域に戻って，鯨の背中でミサを執り行うことになっている。『聖ブレンダン伝』の記述は，海の怪物，鯨さえも服従させる神の意志と，その神の信頼をえたブレンダンの信仰の強さを強調しているが，『航海』では，鯨はより端的に海の驚異として描かれている(3)。

驚異としての鯨は，12世紀にアングロ・ノルマン語で記された『聖ブレンダンの航海』において一層顕著である。聖ブレンダンの一行は鯨を島と間違えて上陸し，火をおこし食事の準備をするが，突然に島が動き出してあわてて船に戻る。この場面は航海譚のなかでも代表的なエピソードのひとつで，しばしば写本のミニアチュールとして描かれるが，神の意志とは無縁の単なる驚異のエピソードである(4)。

ブレンダンの一行を脅かす鯨のエピソードは，自然界の驚異への純粋な驚きの表明であると同時に，中世の聖書釈義を下敷きとしている。聖書における代表的な鯨への言及は，「ヨブ記」と「ヨナ書」である。「ヨブ記」

40.25には，ヨブの非力と対照的に，レビヤタンの強大さが「お前はレビヤタンを鉤にかけて引き上げ，その舌を縄で捕らえて，屈服させることができるか」[5]と記されている。このレビヤタンを悪意の象徴と解釈する伝統を確立したのは，6世紀の教皇グレゴリウスによる「ヨブ記」への注解，『モラリア』（*Moralia in Job*）である。グレゴリウスは，レビヤタンを誘惑の蛇，さらに地獄の悪魔と解釈し，レビヤタンの口はいつでも罪深い霊魂を飲み込むと指摘する。その一方で，レビヤタンを「鉤にかけて引き上げ」るとは，受難のキリストが，人類救済のために悪魔を鉤で突き刺してつり上げたという意味であると解釈する。レビヤタンは「我らが救世主を餌として飲み込み，その結果，神性という鉤の先端で突き刺された…そうして，人類を密かに待ち伏せしていたこの鯨はもはや貪ることかなわない。」レビヤタンとは鯨に他ならないという伝承を確立したのも『モラリア』であり，この鯨こそ我らの古い敵に他ならないと述べて，サタンと鯨を同一視している[6]。

グレゴリウスの解釈は中世において一般的に受け入れられるようになるが，それをそのまま受け継いで鯨を解釈したテクストが，10世紀のエクセター写本に含まれる古英語の『動物譜』（*Physiologus*）である。この動物寓意の伝統に属する断片は，鯨に関して二つのエピソードを紹介する。鯨は岩のように固く，航海者はしばしばそれを島と間違えて船を寄せる。水夫たちは陸での休息をもとめて上陸し，安心して火をおこす。鯨は水夫たちが安心して休息をとっているときを見計らって，突然動きだし船もろとも彼らを海底へと引きずり込む。このように最も油断しているときを狙っておそってくる鯨は，悪魔の狡猾さに他ならない。アングロ・ノルマン語の『聖ブレンダンの航海』に登場したエピソードと比較して，寓意化が徹底している。

さらに鯨は，空腹を覚えると口を開けて香しい芳香を発散して，魚たちを誘い込む。そうしてその巨大な口中が魚で満たされたときに，口を閉じてすべてをむさぼり尽くすのである。ここにも，霊魂を様々な感覚的誘惑で地獄へと誘いこむ悪魔のやり方が見て取れる。そして鯨に捕らえられた

魚が逃げ出せないのと同様に，一度入った者は二度と出ることも逃げることもかなわないのである。鯨は悪魔であり，その口は地獄の門に他ならないという解釈は，中世の説教・教化文学に多大な影響のあったグレゴリウスの著作を通じて確立していたといえる。

こうした解釈は「ヨナ書」の聖書釈義の基本でもある。「ヨナ書」の最も一般的な解釈は，中世の聖書釈義でいうならば「予見」的（anagogical）な読みで，鯨に飲み込まれて3日後に吐き出されたヨナは，十字架の死後3日後に復活したキリストの予型であるとするものである。1470年頃にネーデルランドで製作された木版刷り（xylography）の『貧者の聖書』（*Biblia pauperum*）は，新約と旧約とのタイポロジカルな関係を三幅画のレイアウトを使用した120枚の大型木版画で図示している。キリストの磔刑の場面では，「ヨブ記」40：20が引用されて，十字架とヨブの鉤との対応が示されている。また，ヨナが海中に投じられて鯨に飲み込まれる場面がキリストの埋葬と，鯨の口から吐き出される場面がキリストの墓からの復活と，それぞれ対照的に描かれている[7]。

聖書釈義は，テクストの字義通りの意味（歴史的意味）にくわえて，寓意的（allegorical），教訓的（moral），予見的の3つの読みを展開するが，「ヨナ書」を教訓的に解釈すると，鯨に飲み込まれるヨナは魂の死であり，逆に鯨の体内からの帰還は精神的再生を意味する。鯨に飲み込まれることを精神的な死（罪）と同一視するこうした解釈は，ウルガタ聖書を編纂した聖ヒエロニムスの「ヨナ書」への序文にすでに示されているが[8]，「ヨナ書」を枠組みとして用いた16世紀のインタールード，『ロンドンとイングランドの鏡』（*A Looking Glasse for London and England*）でも，やはりヨナが鯨から帰還して次のように神に感謝している。

> Thus though my sin hath drawne me down to death,
> Thy mercy hath restored me to life.
> .....
> In trouble Lord I called vnto thee,

Out of the belly of the deepest hell,
I cride, and thou didst heare my voice O God :[9]

死者のための祈りの章句を想起するこの台詞において，鯨の体内は地獄と同一であるが，同じ連想はキリストの地獄の征服においても明確に示される。9世紀のオーゼールのハイモによる『ヨナ書への注解』では，ヨナの帰還と関連して，キリストの地獄の征服，魂の地獄からの解放が強調されている[10]。こうした予見的あるいは教訓的な読みの前提として，地獄からの解放はこの一度きりであり，大天使ミカエルによって鍵をかけられた地獄からの生還は二度とありえないという「歴史的」読みがあることは言うまでもない。

地獄の入り口をレビヤタンの口とみなす表現は，中世写本のミニアチュールや柱頭彫刻，アラバスター彫刻において極めて一般的な図像である。また14世紀初頭に製作された「ピーターバラ詩篇」には，鯨の口から吐き出されるヨナの姿と対応するかたちで「地獄の征服」が描かれているが，地獄の入り口はレビヤタンの口そのものである[11]。また12世紀の死後世界の訪問譚，『トヌグダリスの夢』（*Visio Tnugdali*）には，サイモン・マーミオンのミニアチュールを含んだ豪華な15世紀の写本が存在するが，そこでも地獄は巨大なレビヤタンの口である[12]。ここで興味深い点は，レビヤタンの口は，文学でも美術でも，必ずしも厳密な意味での地獄の入り口のみに使用されていた訳ではないという事実である。12世紀以降，死後世界の懲罰の場は永遠の地獄と一時的な煉獄とに分かれる。煉獄と地獄の実際的な違いについては諸説あるが，死後世界のヴィジョンの伝統では，煉獄の火は，それが生者によるとりなしの祈りなどによって軽減される可能性はあるにせよ，地獄の火と変わらぬ激しさで罪人を苦しめると見なされる傾向が強い[13]。

厳密に言うならば，『トヌグダリスの夢』に描かれる地獄は，全てが脱出不可能な地獄ではなく，煉獄的要素を含んだ死後の苦しみの場である。サイモン・マーミオンによる挿絵が描かれた15世紀には，煉獄が完全に地

獄とは分化して確立していたので，その意味ではレビヤタンの口は煉獄の入り口としても機能していたと言える。こうした混同，あるいは併用は『キャサリン・オヴ・クリーブスの時禱書』のミニアチュールにも認められ，そこではレビヤタンの口が，地獄と煉獄との両方に区別なく使用されている(14)。また地獄の口は中世劇の舞台装置としても一般的であったが，そこでも時に同じ装置が地獄と煉獄との両方に使用されていた証拠が残っている(15)。

ステージ上での煉獄と地獄の視覚的混同は，『ハムレット』の亡霊の場面を考えるうえでもひとつの視点を提供してくれる。先王の亡霊が煉獄から一時的に帰還を許された魂であることは，亡霊の口から明確に語られている。

> I am thy father's spirit,
> Doom'd for a certain term to walk the night,
> And for the day confin'd to fast in fires,
> Till the foul crimes done in my days of nature
> Are burnt and purg'd away: (I. v. 9-13)(16)

しかし同時にハムレットは，地獄のイメージを用いて亡霊に言及している。

> why the sepulchre,
> Wherein we saw thee quietly [inurn'd,]
> Hath op'd his ponderous and marble jaws
> To cast thee up again. (I. iv. 48-51)(17)

'jaws' という表現は明らかにレビヤタンの口を連想させるもので，この亡霊の出所をめぐる矛盾は，ハムレットの復讐をめぐる逡巡に直接結びついている。

The spirit that I have seen
May be a [dev'l], and the [dev'l] hath power
T'assume a pleasing shape, yea, and perhaps,
Out of my weakness and my melancholy,
As he is very potent with such spirits,
Abuses me to damn me. (II. ii. 598-603)[18]

もし亡霊が，自ら語っているように煉獄から一時的に帰還を許された先王の亡霊であるならば，その願いを聞き届けることは極めて重要である。煉獄の魂は神により救済を約束された魂であり，その語ることに偽りはない。中世後期の，煉獄から亡霊が帰還する話では，煉獄での苦しみを軽減するための措置（死者のための祈りを捧げるなど）を，亡霊の要求通りに遂行することの重要性が常に強調されている。しかしハムレットは，亡霊の姿そのものが悪魔による狡猾なわなである可能性を考えて慎重になっている。地獄の口への言及は，まさに鯨のように狡猾な悪魔への言及であり，こうしたイメージの混乱は，その起源において中世劇的であると同時に，劇冒頭でのハムレットの逡巡に視覚的に対応すべく仕組まれているのである。

『ハムレット』における「地獄の口」への言及は中世の延長線上にあるが，同じ16世紀のイタリアでは，レビヤタンはまた別な文脈に登場している。アキーレ・ボッキの『象徴的探求の宇宙』（初版　ボローニャ，1555年）は16世紀前半の文学，哲学，神話学などを下敷きとした極めて該博なエンブレム・ブックである[19]。レビヤタンは，そのなかでも解釈が複雑と見なされてきたエンブレムに登場している[20]。［図２］ボッキは古典・聖書学者で，故郷のボローニャに自分の名を冠したアカデミアを創設し，このエンブレムをインプレーザ（標章）として用いた。「謙虚さは知恵を，学習は修辞を完成させ，このひとつの神が完璧な幸福をもたらす」という題辞は，５世紀のマルティアーヌス・カペッラ以来のテーマである知恵と

SAPIENTIAM MODESTIA,
PROGRESSIO ELOQVENTIAM,
FELICITATEM HAEC PERFICIT.

Symb. CII.

[図 2]

修辞の結合を意味するが，挿絵はこれをヘルメスとアテーネーが結合してヘルマテーナとなることで表現している。このエンブレムは，エドガー・ヴィントが指摘したように「雄弁の神ヘルメスの敏速さと知恵の女神アテーネーの堅実さ」という相反する特質を併せ持つように諭すものである[21]。二人の間に描かれているキューピッドが，「このように怪物を手なずける」という題辞とともに，怪物の口に鼻輪と手綱をかけている。鼻輪は過度の雄弁をたしなめるもので，またキューピッドが手に持つ手綱は，抑制や思慮を意味すると言える。それと同時に，挿絵に付随するボッキの詩は，この怪物の起源がレビアタンであることを示唆している[22]。詩は，この怪物に 'en virga te iam Deus euocat orco'（神が今，その棒でもってお前を暗闇から召還する）と言及し，怪物自身を 'orcus'（地獄，地下世界）と呼んでいる。神とはヘルメスで，棒はヘルメスがもつカドュセウスだが，ボッキの詩はこのエンブレムが献じられたボッキのアカデミアのメンバー，ステファノ・サウリーオにむかって，雄弁の神がお前を知識の闇から呼び戻してくれると忠告しているのである。だが怪物がレビヤタンであるならば，同時にこの詩行は，聖書的に，神が人間の魂を地獄から召還するとも解釈可能であり，キリストによる地獄の征服の伝統的な図像を背景として持っていると言える。

『ハムレット』とボッキの例は，「地獄の口」が，中世の図像学と聖書釈義学の伝統に明るい読者のみが解読可能なエンブレマティックなイメージとして16世紀に機能していることを示している。近代以降も，鯨は怪物レビヤタンと重ね合わされて，こうした連想をささえ続けてきたと言える。16世紀には，『ガリバー旅行記』のリリパット人さながらに，オランダの海岸に打ち上げられた鯨を計測する人々を描いた，ヘンドリック・ホルチウスの写実的な銅版画（1594年）が存在する一方で[23]，海の怪物としての鯨は想像力を捉え続ける。16世紀の書誌学者で博物学者であったコンラート・ゲスナーの『動物誌』（ラテン語初版　1551-87年）の「魚類篇」には，'balaena cum adiuncta orca...' という説明とともに，小型の 'orca'（ドイツ語版では Braunfisch＝ネズミイルカ）を従えた巨大な足をもった

大トカゲのような鯨が，帆船を襲ったり，また逆に解体される場面が描かれている[24]。デューラーをモデルとした精緻なインドサイの図版など，客観的で科学的にも正確な図版が多いこの図鑑にしては珍しく，鯨は伝統的な想像上の生物として描かれているのである。この二面性がそのまま *Moby-Dick* へとつながってゆくことは言うまでもなく，中世の「地獄の口」は，この聖書釈義学顔負けの読みの多層性を備えた作品へのマルジナリアに他ならない。

注

(1) Jean-Jacques Boissard, *Theatrum vitae humanae*, (Metz, [1596]). 慶應義塾図書館蔵。

(2) Marvin L. Colker, 'America Rediscovered in the Thirteenth Century?' *Speculum* 54 (1979), 712-26.

(3) H. P. A. Oskamp, *The Voyage of Máel Dúin : A Study in Early Irish Voyage Literature* (Groningen, 1970), pp. 25-26.

(4) Benedeit, *The Anglo-Norman Voyage of St Brendan*, ed. by Ina Short and Brian Merrilees (Manchester, 1979), lines 435-78.

(5) 聖書からの引用は，『聖書　新共同訳』(1987) に拠る。

(6) *Moralia in Job*, 33. 9, 8. 23 (PL. 76 : 682-83, 75 : 824). Gary D. Schmidt, *The Iconography of the Mouth of Hell* (Cranbury, NJ, 1995), pp. 48-49 参照。

(7) *The Bible of the Poor* [*Bibla Pauperum*] *: A Facsimile and Edition of the British Library Blockbook C. 9 d. 2*, trans. with commentary by Albert C. Labriola, and John W. Smeltz (Pittsburgh, 1990), pp. 39, 41, 43.

(8) Schmidt, p. 54

(9) George A. Clugston, ed., *A Looking Glasse for London and England by Thomas Lodge and Robert Green : A Critical Edition* (New York, 1980), pp. 191-92.

(10) Haimo of Auxerre, *Commentary on the Book of Jonah*, trans. by Deborah Everhart (Kalamazoo, MI, 1993), pp. 17-20.

(11) Lucy F. Sandler, *The Peterborough Psalter in Brussels & Other Fenland Manuscripts* (London, 1974), fig. 50, 113. 逆に，ヨナを飲み込む鯨が地獄の口と酷似している例もある。Schmidt, p. 60参照。

(12) Thomas Kren, and Roger S. Wieck, *The Visions of Tondal from the Library of Margaret of York* (Malibu, CA, 1990), p. 45.

(13) Takami Matsuda, *Death and Purgatory in Middle English Didactic Poetry* (Cambridge, 1997), chap. 2.

(14) *The Hours of Catherine of Cleves*, introd. by J. Plummer, 2nd edn (New York, 1975), nos. 46-48.

(15) Matsuda, p. 105n. cf. Robert Lima, 'The Mouth of Hell : the Iconography of Damnation on the Stage of the Middle Ages,' in *European Iconography East and West*, ed. by G. Szönyi (Leiden, 1996), pp. 35-48.

(16) *Hamlet* からの引用は，*The Riverside Shakespeare* (Boston, 1974) に拠る。

(17) cf. 'I'll speak to it though hell itself should gape / And bid me hold my peace' (I. ii. 244-45).

(18) cf. 'Be thou a spirit of health, or goblin damn'd, / Bring with thee airs from heaven, or blasts from hell, / Be thy intents wicked, or charitable, / Thou com'st in such a questionable shape / That I will speak to thee.' (I. iv. 40-44)

(19) *Achillis Bocchii Bonon. Symbolicarum quaestionum, De Uniuerso genere, quas serio ludebat, libri quinque.* (Bologna, 1574). 慶應義塾図書館蔵。

(20) このエンブレムのみを論じた単行本が，1556年に刊行されている。G. Sambigucius, *Gavini Sambigucii Sardi Sassarenssis in Hermathenam Bocchiam interpretatio...* (Bologna, 1556). 近年の解釈としては，Elizabath S. Watson, *Achille Bocchi and the Emblem Book as Symbolic Form* (Cambridge, 1993), 143-47.

(21) Edgar Wind, *Pagan Mysteries in the Renaissance* (New York, 1968), p. 203.

(22) Roger Paultre, *Les Images du livre : emblèmes et devises* (Paris, 1991), p. 77はこの怪物を「ライオンの頭」と記述している。その可能性は否定できないが，ボワサールの図版においてもそうであるように，中世以来「地獄の口」はしばしばネコ科の動物の顔に似ている。

(23) Bartsch, III 13. 94 ; Hollstein 571.

(24) Conrad Gesner, *Conradi Gesneri medici Tigurini Historiae animalivm liber IV. Qui est de piscium & aquatilium animantium natura* (Frankfurt/M, 1604); *Fischbuch. das ist aller vnnd Fischen von dem kleinsten Fishleinn...* (Frankfurt/M, 1598). 慶應義塾図書館蔵。